

中部高地黒曜石資源の開発と最古の黒曜石利用

Exploitation of obsidian sources in the Central Highlands and the earliest obsidian use

島田 和高^{1*}

SHIMADA, Kazutaka^{1*}

¹ 明治大学博物館

¹Meiji University Museum

黒曜石原産地が密集する霧ヶ峰とハヶ岳の一帯には、旧石器時代及び縄文時代遺跡が多数分布している。しかしながら、両者の分布パターンは対照的である。旧石器時代遺跡が原産地の周囲に密集し、標高 1500m 以上の比較的高地に位置しているのに対して、縄文時代遺跡はそれよりも標高の低い丘陵地を中心に分布している。この事実は、両時代における黒曜石獲得の技術、原産地の景観利用、集団編成、流通システムの歴史的变化を反映している。中部高地の黒曜石は、関東平野を中心に広く中部日本で利用されている石器時代の遠隔地石材である。ここでいう遠隔地とは、消費地まで 80km 以上の運搬コストが要求されることを意味する。

黒曜石獲得技術：旧石器時代における黒曜石獲得は、露頭やその他の採取地点の地表面から原石を直接採集している。これまでに、露頭を掘削する等の行為があった証拠は得られていない。最古の中部高地産黒曜石の遠隔地利用は、38 ka cal yr BP に遡る。一方縄文時代には、極めて小規模な遺跡を除き原産地近辺には、集落遺跡が一切残されていない。その代わりに、多数の竪穴を用いて地下に埋蔵されている黒曜石を採掘した大規模な遺跡が残されている。掘削技術の存在が縄文時代の黒曜石獲得を特徴付ける。最古の地下採掘活動は、縄文時代草創期後半に遡る。

原産地の景観利用：旧石器時代の黒曜石獲得は、原産地直下で行われた原石の加工、石器製作、短期間の逗留と強く結びついている。おそらく狩猟活動も行われていたであろう。また、回帰的な景観利用が行われた結果、大規模な石器製作跡が形成されることに特色がある。このことが遺跡が原産地近辺に密集する要因となっている。縄文時代草創期後半の採掘活動では、採掘された原石の加工が採掘坑の脇で行われている。しかしながら、それ以降の採掘活動には石器製作が伴わない傾向が強い。縄文時代の黒曜石獲得は、地下採掘活動と黒曜石原石の搬出に特殊化し、その他の生業活動の痕跡が希薄であることに特色がある。

集団編成と流通システム：旧石器時代の黒曜石獲得パターンは 3 種類ある。1. 地域集団の広域に及ぶ移動領域に黒曜石獲得が予め組み込まれている場合、2. 地域集団から派遣された別働隊が黒曜石を獲得し運搬する場合、3. 原産地に近い地域集団が別の地域集団に黒曜石を供給する場合。後期旧石器時代前半期 (38 - 28 ka cal yr BP) には主に 1. と 2. のパターンが認められ、後半期 (28 - 16 ka cal yr BP) に 3. が登場する。縄文時代の地下採掘には、採掘活動に一定期間従事したタスクフォースの存在が推定される。採掘排土の重なりの中から発見される土器や炉跡は、作業期間に応じた居住行為があった証拠である。縄文時代集落と採掘遺跡は、拠点と作業場の関係にあり完全に区別されている。標高 1500m 以下の丘陵部から低地に分布する集落遺跡では、大量の黒曜石石器群が発見されることがあり、黒曜石原石の備蓄が行われた痕跡も残されている。こうした遺跡は黒曜石流通の中継地点であったと考えられる。また、特定の時期と地域に特定産地の黒曜石が流通する傾向があり、このことは、黒曜石流通を制御する地域集団の存在ないしは発達した地域社会の関係態、あるいはその両者を反映している可能性が高い。

関東平野の周辺には、黒曜石の原石と石器に対する蛍光 X 線分析により判別されている中部高地グループ、高原山グループ、箱根グループ、伊豆グループ、そして神津島グループの産出地域が分布している。口頭発表では、後期旧石器時代前半期の初頭における関東平野を居住地とした旧石器時代集団による最古の黒曜石資源獲得について検討し、日本列島へのホモ・サピエンスの拡散との関係について議論する。

キーワード: 後期旧石器時代, 縄文時代, 資源獲得, 黒曜石, 縄文鉱山

Keywords: The Upper Palaeolithic, The Jomon Period, Natural resource exploitation, Obsidian, Jomon mining